

平成 27 年度 第 1 回 鶴岡市立藤沢周平記念館運営委員会（会議概要）

○日 時 平成 27 年 6 月 11 日（木）午後 1 時 30 分～16 時 00 分

○会 場 東京第一ホテル鶴岡

○審議事項 1 報告

(1) 平成 26 年度運営状況について

2 協議

(1) 開館 5 周年記念特別企画展（後期）について

(2) 第 10 回企画展の進め方について

(3) その他

3 その他

○出席者委員

遠藤展子、遠藤崇寿、鈴木文彦、栗原正哉、犬塚幹士、東山昭子、高山邦雄、堀 司朗

○欠席委員 湯川 豊

○市側出席職員

鶴岡市長 榎本政規

教育委員会教育部長 小細澤 充、教育委員会社会教育課長 佐藤正哉、

教育委員会藤沢周平記念館長 鈴木 晃、同館主査 三浦真紀、同館専門員 成澤万寿美、

同館専門員 進藤恵理也、同館嘱託学芸員 齋藤冬華

○その他出席者

高橋吉弘、穴澤 亮（運営支援業務受託者）

○公開・非公開の別 非公開

○非公開の理由 顕彰する個人の情報を含むため

○報告

(1) 平成 26 年度運営状況について

◆内容

平成 26 年度入館者（来館者アンケートを含む）、書籍等販売実績及びソフト事業実施状況について報告

〈意見など〉

◆入館者対策について

- ・開館 5 年を迎え、もう少し、市民に興味をもってもらい、来館に繋がる工夫を考えていくべき時期となっている。
- ・小中学生・高校生向け事業（例：藤沢作品の題名習字展）を行うことで、その家族なども巻き込んだ来館が見込める可能性がある。是非実施してほしい。
- ・会期前日にマスコミや教員等を対象とした内覧会を行ってみては。
- ・シニア割引、市民割引なども検討してみては。
- ・館内朗読会の朗読を少し若い人に読ませることをやってみたら良い。例えば、群読なり、グループで朗読をすることで、作品への愛着のようなものも醸し出されることもあると思う。高校の文学部、図書委員のような方々に読んでもらうとか。

※地元集客については今後の運営の鍵を握る課題のひとつと捉える。

有料施設であることを踏まえつつ、より良い方向性を探り、実践できるものから行っていくように検討を行う。

○協議

(1) 開館5周年記念特別企画展（後期）について

◆内容

- ・企画展テーマ：開館5周年記念特別企画展
「海坂藩」の世界を通して、作品の魅力を紹介する。
- ・会期案：平成27年10月9日（金）～平成28年3月29日（火）
- ・企画監修者案：鈴木文彦氏、栗原正哉氏
- ・展示構成 資料により展示構成案を説明
 - (1) 「海坂藩」という創作世界
 - ① 「海坂藩」の紹介
 - ② 「海坂もの」と呼ばれる作品
 - ③ 「海坂藩」確立まで
(3作品『暗殺の年輪』、『隠し剣』シリーズ、『蟬しぐれ』)
 - (2) 「海坂藩」の情景（城と三ノ丸周辺、山や川、湊町や支藩）
 - (3) 「海坂藩」の城下
 - ① 五間川
 - ② 城下の町並み
 - ③ 四季の風景
- ・ミニギャラリー：藤沢作品にみる庄内の食
- ・図録
 - ①制作数 2,000部
 - ②発行日 平成27年10月9日（金・会期初日）
 - ③規格 既企画展図録と同様
 - ④内容 展示内容の抄録
 - 寄稿 ・監修者 遠藤展子氏
 - ・湯川豊氏、あさのあつこ氏
- ・関連イベント
 - ①朗読会
 - ②館内朗読会
- ・広報
 - ①ポスター（1,000部）・チラシ（40,000部）
 - ②市広報・プレスリリース
- ・展示制作協力 株式会社トータルメディア開発研究所（デザイン）

〈意見など〉

- ・現在開催中の展示は、すごくわかり易くてとても良い展示と感じた。ずっと滞らずについていける廻りになっているように思う。後期の展示も、そういうような期待がかかる。
- ・海坂藩の情景と同時に、海坂藩という架空の藩を設定して、そこで、多くの人物像を活

躍させている。海坂藩自身に対する藤沢周平さんの思い入れというか、それが地元の人にも伝わってくるような部分が出てくれば、もっと市内の方々を呼び込めるような形のものになっていくと思う。

- 山形大学の「地域から学ぶ」という講座があり、その一講を担当している。山大の農学部に来ている学生の8割が県外生で、初めにこの土地の紹介をするには、海坂藩はとても良い。最初にガイダンス的に海坂藩ってというか、城下町鶴岡を含んでいる色んな部分を紹介するが、道案内をしてやらないと、黙って通り過ぎていくような部分があり、藤沢先生を見せること、触らせること、そんな風な部分がないと思う。
- 藩名は、実際にある地名をもちいて、庄内とか鶴岡とか、金沢、仙台のような付け方するのが普通。その他に、藩主の苗字を、酒井藩だとか前田藩だとか伊達藩だとか、そういう言い方もある。でも、実際江戸時代に、通常、藩の名前がどう言い交されていたのかということが、実はあまり良くわかっていない。そういうところに「海坂」、「海坂藩」と藤沢さんが付けられた。響き、確かにとても良い。
- 藤沢さんの「海坂」という考え方は、水平線のことを指しているような意味合いのことを書いているが、実際には水平線ではないような気がする。現世と黄泉、常世の国、黄泉の国っていうのか、それとの境目が「海坂」。いわゆる海の境目にあるというのが普通の「海坂」に対する考え方。私はどちらかというとな藤沢さんの水平線にすごく惹かれている。そういう意味では、「海坂」という藩の存在ってすごいと思う。そのモデルになっているのが鶴岡であろうということだが、藤沢さんが見た鶴岡というのは、今から50年も60年も前の戦前の鶴岡から戦後間もなくの鶴岡であった。その頃と今の鶴岡はすごく変わっていて、古いものをどんどん無くしているのが鶴岡と思う。侍町であった家中新町の風景もすごく違って、家がみな新しくなって、鶴岡は城下町でありながら城下町の雰囲気はかなり無くしているのではないかと。かえって明治の鶴岡の方のイメージが強いかもしれない。そういう中で藤沢さんが、蘇らせてくれた。
- 次回は海坂藩の情景だとか、五間川だとか町並みを展示するのだが、何か一本芯があってもいい。藤沢さんの「海坂もの」というのは、藤沢さんが愛着をもって書かれたせいとか、雰囲気も中味も、他の作品と違うという気がする。それが、鶴岡や庄内の歴史に絡んだものを少し濃厚に出しているのではないかと。『風の果て』なんかは、「海坂もの」とは言われていないみたいだが、実は、本質的には「海坂もの」だと私は思う。「海坂もの」の展示をするのに単なる情景、景観、そういったものだけではないのではないかと。「海坂もの」っていった時には、その背景、作品のテーマに照らした部分で、単なる景観だけでなく、何かこう強烈な一本の芯のようなものがあるのではないかなと考える。
- 二派對立。いつの時代でも派閥争いはあった。実際に庄内藩でもあったわけだが、それを展示化することは難しい。
- 井上ひさしさんが描いた海坂城下図を展示するようだが、井上さんの図は、鶴岡を知っている人間は書けない。作品に合わせて書こうと思うとあちこち矛盾が出てくる。
- 藤沢さんの「武家もの」の中で、歴史的事実、地名とか実在の人名を使ってないものは、基本的に「海坂もの」と言っても良いと思う。だから、海坂藩をテーマにして企画展を行う時には結局「武家もの」で、架空のものは全て入ってしまい、逆に何か絞らないと

ということで、我々が相談受けた最初の時は、「海坂藩の藩主と女」という項目もあった。やはり人間がそこにいて行動するわけだから、まして小説は人間が書くものだし、そこに入り込むと、結局藤沢作品の全体を語る画になってしまうので、今回は、情景、決して風景ではなく情景に絞っていこうということでここに現れている。

- ・ 図録の最後に載せる「海坂藩」の要素を抜き出した表を展示の方には載せられないだろうか。最後の、〈「海坂藩」の味〉の終わったところでも、その前でもいい。何作、どうあるのかという記録的なことをわかりたいという人がもしいるとすれば、展示の最後の方にあっても良いのではないか。図録だけだと購入した人でなければわからないわけなので、展示の中にも、あった方が親切なような気がする。
- ・ 要素を抜き出した表は、無料の展示目録があるが、ああいっただのも良いかも。藤沢さんの読者にとっては、藤沢さんに興味あって来た人には更に詳しくわかっていい。勿論、展示もしつつだが。
- ・ 藤沢さん「海坂藩」に寄せる思い。作家の思いがもう少し伝わってくるような感じにならないのかな、と思う。
- ・ 外から来たお客様が、今の鶴岡を見ると何となくがっかりさせられるような心配がある。つまり、藤沢さんの描く城下の情景というのは、ちょっと古い時代。藤沢さんは戦争前後の鶴岡の風景を見ているわけなので、その当時の古い写真、通りの写真だとかを見せると、何となく藤沢さんの「海坂もの」の情景がわかってくるような気がする。その辺も重点のひとつに挙げて良いと思う。
- ・ 藤沢さんは昭和2年生まれ。昔の鶴岡を知っているのは、昭和ひと桁生まれくらいまでで、多少、藤沢さんが見た鶴岡の風景と一緒に見ている、その辺を境目で物を考えたら良いのではと思う。
- ・ 鶴岡はすごく変わった。内川も変わった。昔の古い写真を飾ると思うが、今の内川の写真と比べるとすごく変わった。市役所の前通り辺りなんかはまるっきり変わってしまった。西田川郡役所、警察署、裁判所があって、という、近代の風景だが、それすらすごく変わった。他の通りもほとんど変わった。銀座通りも昭和通りも。そういう写真集めるのは大変だが、図書館にあるので、昔の絵葉書とか、そういうものを、眺めてみた方が良い。

◇協議結果◇

- ・ 展示概要について、了解を得る。会議で出された意見を踏まえ、展示内容を仕上げることにする。

(2) 展示の名称について

- ・ 〈「海坂藩」の憧憬〉、〈「海坂藩」を行く〉、〈「海坂藩」の世界〉を提案

〈意見など〉

- ・ 憧憬というと、誰が憧れるの、ということを思い浮かべる。言葉としては良いが、何か意味合いからちょっと。この3つの中では「行く」か「世界」のどちらか、そう考える。

- ・実は、展示の内容を考えると「海坂藩の世界」というが一番かもしれないが、これまでずっと「世界」だったのでもう飽きてしまったというか。
- ・飽きたところはあるが、やはり「世界」かと。この3つの中ならば「世界」なのかなという感じもする。「憧憬」はぼやっとしている。
- ・中味とは別だが、言葉としては「藩に行く」、「藩を旅する」。

◇協議結果◇

- ・会議においては、監修者・事務局に一任とされたが、協議終了後に、「海坂藩」のふるさと」という提案があり、承認される。

(2) 第10回の企画展の進め方について

◆内容

①企画展対象作品について

候補作品「霧の果て 神谷玄次郎捕物控」
「橋ものがたり」
「獄医立花登手控え」シリーズ

②会期について

平成28年4月1日（金）～10月4日（火）

〈意見など〉

- ・テレビなどと連動していた方が、お客さんは来易いという感じはする。
- ・『神谷玄次郎』は何回見ても面白い。また見る気になる。
- ・方向としては、今のところは『神谷源次郎』の方向で。もし、そうでなかったら『橋ものがたり』などの「市井もの」、「江戸市井もの」。
- ・捕縄とか提灯とか、御用の実物があったら一番おもしろい。
- ・「彫師伊之助」も面白い。
- ・5周年ではないが、会期長くしなくていいのか。5周年は、半年ずつにしたが、いつもだと冬は来館者が少ないので軽めの企画で短めにするが、来年もこれで良いのか。
- ・両方観てもらうには10月4日で終わる方が良い。

◇協議結果◇

- ・武家ものの作品となると、10月から開催する〈「海坂藩」のふるさと〉の展示内容と相当重なる部分が出て来るため、「市井もの」を取り上げることとし、昨年、今年とテレビドラマとして放映され、馴染みのある「霧の果て 神谷玄次郎捕物控」を対象作品に決定し、会期は提案通りとする。
- ・捕物小説であることから、捕物道具等の展示について、業務支援業者から協力を得る。

(3) その他

◎運営支援業務受託者より助言

- ・地域の方々があまり来ないということは良くあること。企業資料館を作っても社員が一

番来ないとか。この辺については、自分との関係性を見いだせないと入って行けない。そのきっかけを作っていくというのは大事かなと思う。

次回の「海坂藩」の企画展は、非常に大きなきっかけになると思うので、ここで、集客のための手を打っていくべきだ。例えば、先ほどから情景とか、色々出ていたが、写真を趣味として撮られる方多くなった。ネットなんかを上手く活用して、期間が始まる前に「海坂もの」を読んで、自分の感じた地域の、自分の身の回りの風景の写真を撮ってそれを募集して、この期間中に館内、例えば閲覧室、エントランスにスクリーン、モニターなどを設けて一緒に観ていただく。地域の方々も、展示の中に一部入っていただくような自分との関係性がものすごくできてくるので、「海坂もの」をきっかけに藤沢周平作品をもっと読んでみようとか、そういう方へも移行していくと思う。自分たちの住む地域に興味をもっていただき、地域の資産を大事にしてという意識を醸成する意味でも、関係性を作っていく仕掛けづくりをしていくことは良いのかなと思う。

閉 会